

平成21年度調査研究

「長野県内の高校、短大、大学の登山（的）活動（野外活動を含む）についての調査」

長野県山岳総合センター

はじめに

当山岳センターで開催している研修講座のうち、唯一名称も変わらず40年間続いている「長野県高等学校登山研修会」。かつて昭和の時代には、100人を超える参加者を数えたが、平成に入り少しずつ減少して、平成21年度の参加者は、一桁台の7人。

時代の流れとはいえ、やはり寂しい。

一方、「若者のやま離れ」が叫ばれ、「中高年しかいない」というイメージが定着していた感が強かった登山の世界に、ここ数年、20～30代の若者の姿を見かけることが多くなってきた。

新聞やテレビニュースでも、「若者 山へ」とか「若い女性の中に静かに登山ブーム」という記事掲載や報道が時々なされている。カラフルな服装で山登りを楽しむ若い女性が写った写真記事を見かけることも多い。

このような中で、「長野県高等学校登山研修会」の研修内容及び今後の山岳総合センターの事業等を実施する際の基礎的資料とするため、県内の高校から大学までの登山（的）活動（野外活動を含む）の現状について実態調査をすることにした。

調査対象は長野県内の 大学8校 短期大学9校 工専1校 高校111校 の計129校。
調査方法は、調査用紙を各校に送り、記入後、調査用紙を郵送してもらう方法をとった。

1 クラブ等の状況について

(1) 登山活動をしているクラブがある学校数は？

校種	母集団 (校)	回答数 (校)	登山活動クラブがある学校数(校)	割合
高校	111	97	29	26%
短大・工専	10	7	0	0%
大学	8	6	3	38%
計	129	110	32	25%

*割合は、母集団に対する登山活動クラブがある学校数の割合を示す。

*大学の中には、一校の中に複数のクラブがある学校がある。校数としては3校だが、クラブ数としては5。

高校29校の地域別内訳

地域	北信	東信	南信	中信
校数	5校	6校	7校	11校

高校、大学は、全校数の内、約4校に1校の割合で登山活動をしているクラブがあり、高校では、中信地域が、11校で一番多い。

短大および工業高等専門学校には、その様なクラブはなかった。

高校のうち、以前は登山活動をしているクラブがあった学校が、24校あった。そのうち、平成15年以降廃部になった学校が、8校あった。

(2) 登山活動クラブの名称は？

【高校】

クラブの名称	校数
山岳部(班)	22校
ワンダーフォーゲル部	2校
アウトドア部	2校
山岳同好会	1校
科学部	1校
地学研究部	1校

【大学】

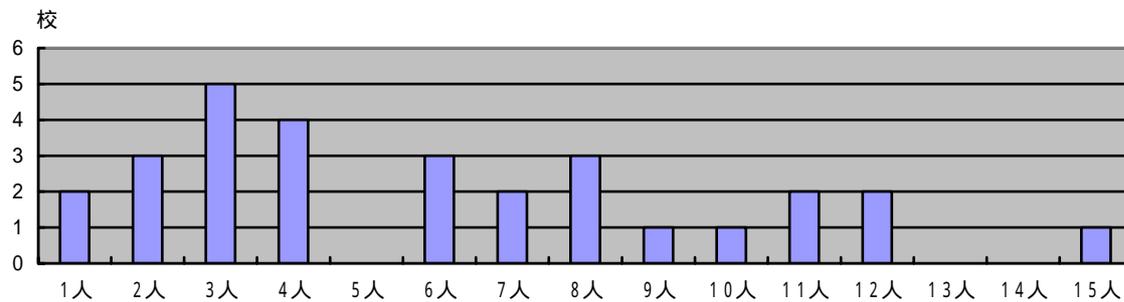
クラブ名	クラブ数
ワンダーフォーゲル部	2クラブ
山岳部	1クラブ
山岳会	1クラブ
山歩会	1クラブ

山岳部(班)という名称が一番多いが、科学部や地学研究部といった名称で登山活動をしているクラブもある。

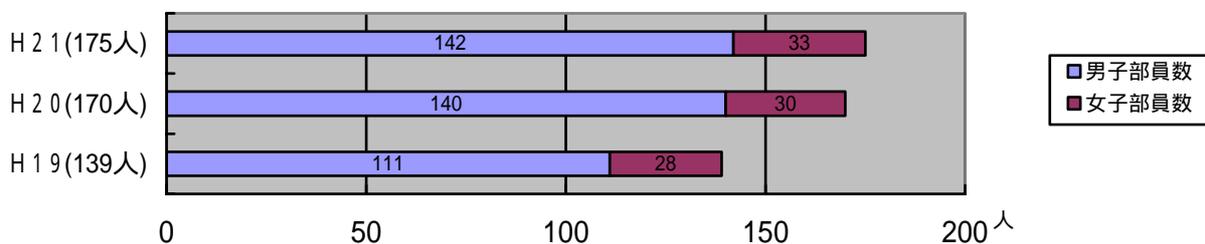
(3) 部員数は？

【高校】平成21年度の部員数別の学校数は下記のグラフのようにになっている。

1校あたりの平均部員数は6人。



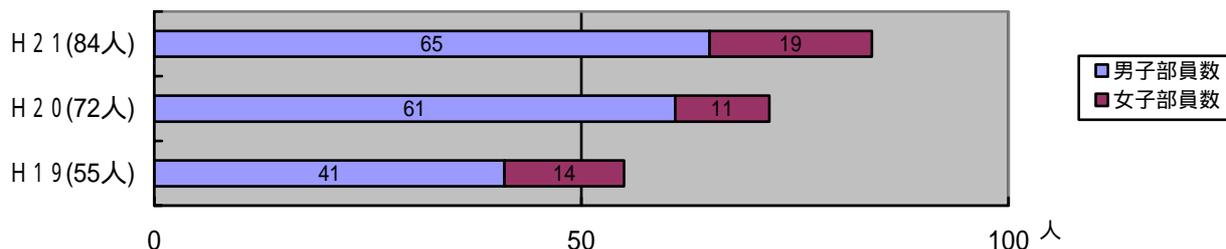
【高校】過去3年間の県内総部員数および男女別の部員数は下記のグラフのようにになっている。



長野県内の高校のここ3年間の総部員数は、僅かではあるが増加傾向にある。女子部員の割合は、20%弱。

【大学】5クラブの平成21年度の部員数は、それぞれ5人、8人、18人、21人、32人。

【大学】5クラブの過去3年間の総部員数および男女別の部員数は下記のグラフのようになっている。



ここ3年間、長野県内の大学の総部員数は、増えてきている。H21年度の総部員数は84人で、女子部員の割合は高校より多く、20%を越えている。

(4) ここ10年間の活動の様子は？

【高校・大学合わせて34クラブ】

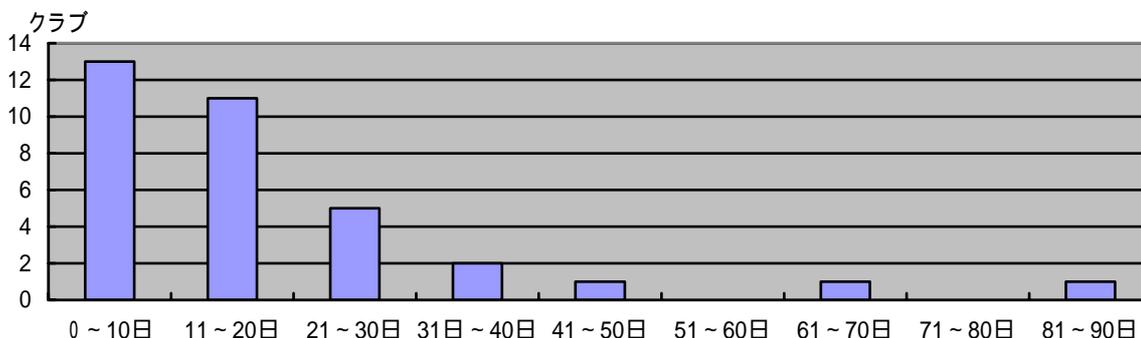
- 以前より人数も増え、どちらかというと活発に活動するようになってきた・・・3クラブ
- 以前より人数が減り、どちらかというと活動が停滞してきている・・・5クラブ
- 人数、活動内容ともに、あまり変わらない・・・2クラブ
- 年度によって人数の増減を繰り返しながら活動をしている(活動状況も変化している)・・・17クラブ
- 最近活動を始めた・・・5クラブ
- よくわからない・・・2クラブ

年度によって人数の増減を繰り返しながら活動をしているというクラブが多い。全体の半分。人数も増え、どちらかというと活発に活動するようになってきたクラブが3クラブある。

2 平成21年度活動状況

(1) 年間活動日数(個人活動および日常的な活動は除く)は？

高校・大学合わせて34クラブの年間活動日数別のクラブ(校)数は下記グラフの通り



・クラブによる活動日数の差が大きい。
 ・高校では、クラブはあるものの、実質活動をしていない学校が2校あった。

(2) 合宿等の主な活動場所は？

【北信高校 5校】

春 物見岩・荒船山・高社山

夏 斑尾山・野尻湖一周・仙丈ヶ岳・白馬三山・爺ヶ岳～針ノ木岳

秋 根子岳～四阿山・針ノ木峠・赤岳

冬

【東信高校 6校】

春...美ヶ原・長野県高等学校登山研修会(山岳総合センター)・根子岳・四阿山

夏...西穂高岳・焼岳・燕岳～常念岳・烏帽子岳～槍ヶ岳・槍ヶ岳

秋...荒船山・霊仙寺山～飯縄山

冬...北横岳～縞枯山・鍋倉高原・梅池高原・上高地

【南信高校 7校】

春...風越山・守屋山・塩嶺峠・戸倉山・秋葉街道

夏...常念岳～蝶ヶ岳・編笠山・権現山・白馬鑓ヶ岳・涸沢～奥穂高岳、北穂高岳・硫黄岳・風越山

秋...戸倉山・涸沢・天狗岳・高校生クライミング研修会(山岳総合センター)・風越山

冬...風越山

【中信高校 11校】

春...白馬乗鞍山スキー・木曾駒ヶ岳・美ヶ原・霧訪山・戸谷峰・黒姫山

夏...烏帽子岳～雲の平・槍ヶ岳・西穂高岳・鳳凰三山・北岳・白馬岳・小川山クライミング・

金峰山・上高地～槍ヶ岳・鳥居峠・キャンプ

秋...飯縄山・クライミング練習(山岳総合センター人工岩場)

冬...小遠見山・スキー合宿

【大学 5クラブ】

春...涸沢・キャンプ

夏...剣岳・針ノ木岳～前穂高岳・北アルプス縦走・南アルプス縦走

秋

冬...五竜遠見尾根・鳳凰三山～東駒ヶ岳・八ヶ岳

高校では、春、秋を中心に、地元の山を活動のフィールドとしているところが多い。夏は、夏休みを利用して、北アルプスや南アルプスを登っている学校が何校もある。

合宿等で、クライミングの活動に取り組んでいる学校も、数校見られた。

大学では、北アルプスや南アルプスが活動の中心になっている。

(3) 学習会等の実施状況は？

日頃の活動も含めて学習会等を実施しているクラブは、34クラブ中21クラブ 62%

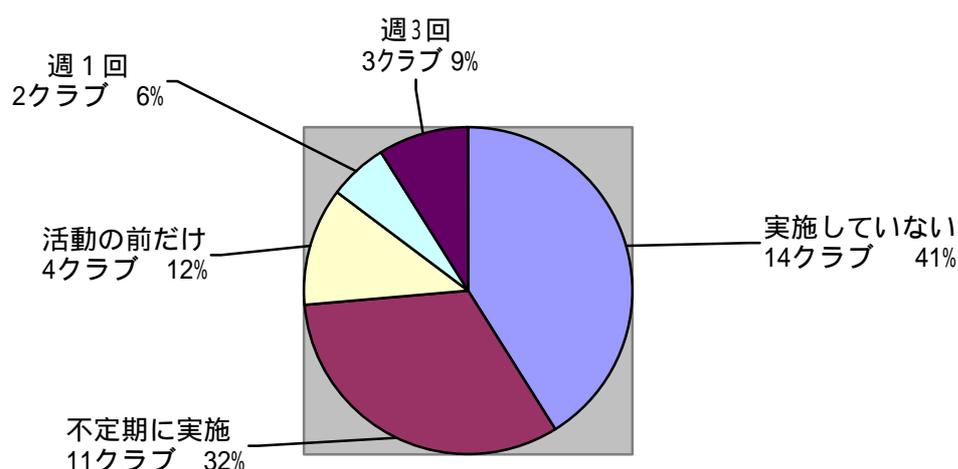
具体的な学習内容は？

地図の読み方	16クラブ	山およびコースの研究	7クラブ
服装、装備、用具の知識	14	山の動植物	3
生活技術	14	救急法	3
気象の知識、天気図作成	13	危急時の対策	2
登山技術一般	11	ロープワーク	1
登山等の概念	8		

6割以上のクラブで学習会等を実施している。地図の読み方や服装、装備、用具の知識、生活技術等の学習会を実施しているクラブが多く、救急法や危急時対策といった内容の学習会をやっているクラブは少ない。

(4) 体カトレーニングの実施状況は？

体カトレーニングを実施しているか？



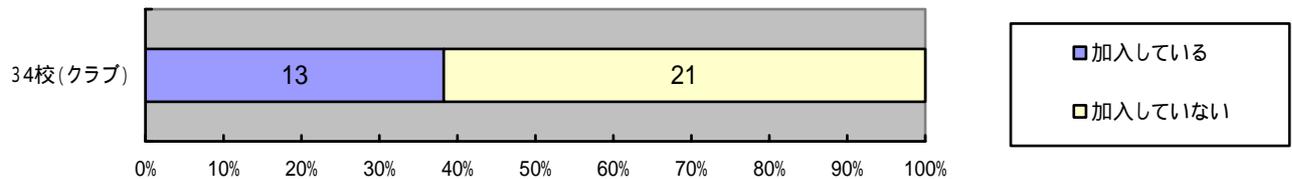
どんなトレーニングを実施しているか？

長距離走	10クラブ	ストレッチ	3クラブ
クライミング・ボルダリング	6	ウエイトトレーニング	2
ぼっか訓練	5	自転車	1
階段昇降	4	各種スポーツ	1

6割近いクラブで体カトレーニングを実施している。フリークライミングやボルダリングをトレーニングに取り入れているクラブもある。

(5) クラブ独自の保険に加入しているか？

【高校・大学】

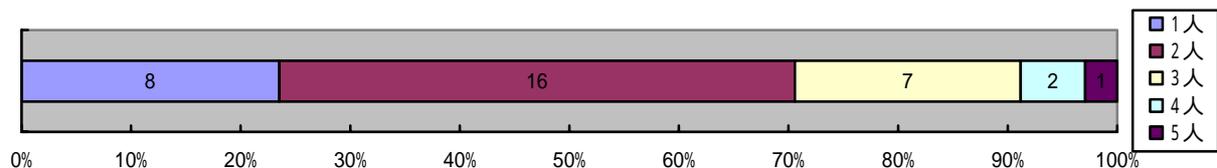


- 具体的な保険会社名
- ・日本山岳協会の山岳遭難・捜索保険
 - ・東京都山岳連盟の遭難共済保険
 - ・ニッセイ同和損害保険

4割弱のクラブが、クラブ独自の保険に加入している。現在保険には加入していないが、近いうちに加入予定の学校もある。

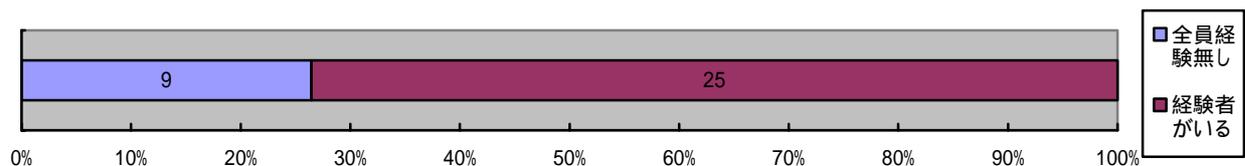
3 平成21年度 34校(クラブ)の顧問の状況

(1) 顧問の人数別クラブ数は？



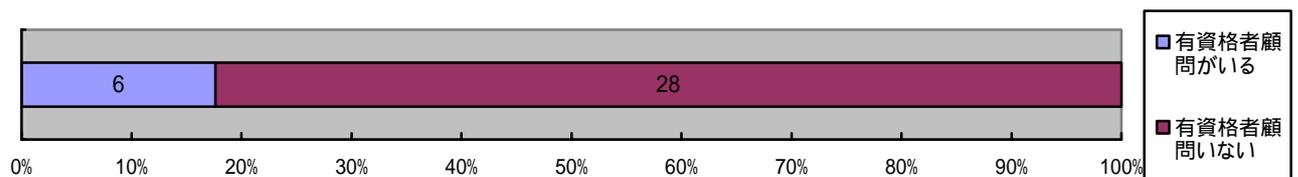
顧問の人数が2人以下のクラブが、全体の7割。

(2) 顧問自身の、山岳部や山岳会等のサークル活動の経験の有無別クラブ数は？



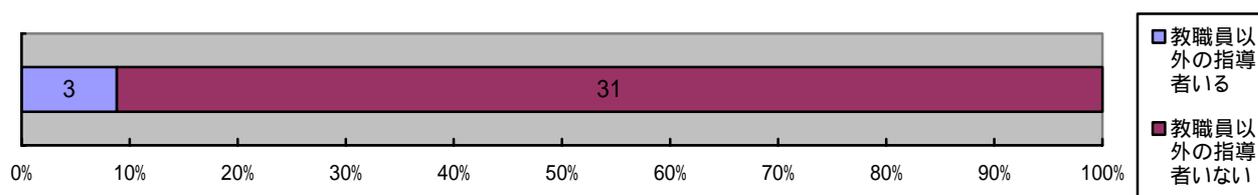
高校、大学で山岳関係のクラブ活動を経験したり、現在社会人の会等で活動したりしている人が顧問にしているクラブは全体の74%。

(3) 日本山岳協会等の指導員資格をもっている顧問の有無別クラブ数は？



顧問のうち、日本体育協会スポーツ指導員の資格を有する顧問は6クラブの6人。

(4) 教職員以外の指導者の有無別クラブ数は？



教職員以外の卒業生が顧問についている学校は3校。2校は卒業生、1校は一般社会人が指導にあっている。

(1) 運営上の問題点、困っていること、希望等は？(自由記述)

【該当クラブがある高校】

- ・単なる遊び中心のクラブになっている。気楽に参加できる反面、無責任な活動になっている。
- ・入部する生徒の減少。
- ・顧問の後継者をどう育てていくか。
- ・金銭的にも、専門店が少ないという土地柄的にも、装備をそろえるのが大変。顧問自身山岳活動の経験が乏しく、生徒を指導する際とまどうことが多い。
- ・登山という自由な活動が、マニュアル化された日々の生活の中でしか思考されない点に危惧を覚える。または、それに合わせてしか動けないことにやる気を失う。
- ・今年より転動してきたが、予算が少なくテントの購入ができない。装備が整わない学校については、貸し出しを行うようなことはできないか。
- ・長らく途絶えていた活動をようやく復活させた。テント、コッヘルは他校のものを借用している。校内規則が厳しく班に昇格できていないため、生徒会の予算を使用できない。
- ・生徒、顧問の体力と技量に応じて山を楽しむことを基本理念としている。しかし、部員がなかなか増えず、学校の行事計画が詰まっていた山に行ける日が限られているため、活動も細々としたものになっている。
- ・登山靴や雨具など基本的な装備をそろえるのに必要なお金を出してもらえない家庭がある。
- ・部員が少ないこと。
- ・生徒がクラブに加入してくれないのが悩み。
- ・部員数の減少、登山装備の不足、登山に対する周囲の関心が低いこと。
- ・顧問にクラブ指導の時間がない。他の分掌が多忙すぎる。
- ・夏の装備がなく教員の個人装備で凌いでいる。
- ・山岳保険に加入する必要性は感じているが、費用面などでそのままになっている。
- ・3年生が引退し、部員がいなくなった。
- ・部員の確保。4月のクラブ結成時にあと2名の新入部員を確保しないと同好会へ降格となってしまう。特に女子が難しい。
- ・特になし。生徒と楽しんでやっている。

【該当クラブがない高校（以前はあった高校）】

- ・生徒のアウトドア志向が希薄なため、山岳部復活の兆しが無いことが残念。他校、あるいは全国的な傾向を知りたい。
- ・部員数の激減及び指導できる教員の確保が課題。
- ・山岳部は顧問の退職により廃部となり、ワンダーフォーゲル部は、部員が集まらず廃部となった。
- ・部員希望者がいない。
- ・山登りを希望する生徒がいない。また、教員も、指導できる知識をもった人材がいない。
- ・生徒激減と小規模校のため、クラブをつくることが出来ない現状がある。

【該当クラブがない高校（以前もなかった高校）】

- ・現在、山岳クラブ、ワンダーフォーゲル部、スキークラブなどなく、アウトドアクラブもない。自然を楽しむクラブなどあればいいが、今のところない。
- ・身近な山に休日に出かけようとする気持ちももてるような機会が増えると良いが。
- ・生徒増加により、今後サークル活動も活発になると思われる。

【該当クラブがある大学】

- ・新生が入部しない。
- ・山岳知識をよりいっそう身につけなくてはならないと感じているが、経験者が不足しているのが現状。今年度は新生が少なく、その分、目が届くようにしたい。
- ・山へのアプローチでは、車がないと困難な場合が多い。組織としてまだ機能していない。
- ・特に問題なく活動できている。

(2) 学校の施設としてのクライミングボードはあるか？

【クライミングボードがある学校】

- ・高校6校（中信3校 南信3校）
- ・6校の内、3校はほとんど利用実績がないのが現状

まとめ

今回のアンケートをまとめてみていちばん感じたことは、登山活動をしているクラブをもつ高校、大学とも、顧問の先生そして上級生を中心に熱心に活動をしているということである。学習会を実施したり、体力トレーニングにも取り組んだりしている学校が多い。また、クラブ独自の保険に加入している学校は、4割近くあった。

時間的にも金銭的にも厳しい状況の中で、クラブの活動に取り組んでいる顧問の先生方の姿そして生徒や学生達の姿が想像できる。

「平成4年の県内の公・私立全日制の高体連の登山部加入者数は406人であったものが、平成12年には221人、平成13年には200人を切り、平成16年からは120人から140人前後を推移している状況」（『中信高等学校年報・2009』による）であったが、今回のアンケートでは、平成2

1年度の山岳部加入者数は175人。この約20年間で登山部等の部員数は半分以下に減ったことになる。

この数字の違いからしても、「長野県高等学校登山研修会」への参加者の激減は頷ける。

また、各校の活動場所を見ても、雪のないフィールドが多く、『雪上での歩行技術（夏山の雪渓通過技術等も含む）およびテント設営などの基礎的な技術を習得する』というねらいのもと実施されている「長野県高等学校登山研修会」への参加者が減っているのも当然といえる。

しかし毎年「長野県高等学校登山研修会」への参加者はある。平成21年度は7人という寂しい数ではあったが、平成20年度には16名の生徒、顧問が参加している。先ほど引用した『中信高等学校年報・2009』からもわかるように、登山部加入者数は平成16年頃を最低ラインとして、ここ2～3年部員数は増加傾向にあり、今後参加者が増える可能性もある。

参加した生徒のアンケートの中に「雪上でのピッケルを使った基本的な止まり方を学んで、ピッケルって便利だなと思った」というような、実際に体験したからこそ感じることができた感想もあった。

新緑と残雪に覆われた5月のこの時期に、たっぷりの雪の中でいろいろな体験ができ、日常生活では味わえない景色が楽しめる長野県の地元の利を活かさない手はない。スキー人口も減っている中、雪上での体験ができるこの研修会は、貴重なものとも言える。

また、「顧問の後継者」を育てるという意味からも、「長野県高等学校登山研修会」は格好の研修会になると考える。

県内の大学においては、部員数が増える傾向がみられる。これは、もしかしたら、「若者 山へ」とか「若い女性の中に静かに登山ブーム」といったものとの関係があるのかも知れない。今後も、大学での部員増の傾向が続く事を期待したい。

今回のアンケート結果からみえてきた状況の中で、山岳総合センターの研修講座は、時代の流れやニーズに合わせていくことが必要であるとともに、仲間と共に自然とのふれ合いができる場として、絶やさず続けていく研修会があっても良いと思う。

「長野県高等学校登山研修会」は、基本的には活動場所を「雪上」とし、今後も継続していきたい研修会と考える。そして、参加者が増え、参加した顧問の先生や生徒達にとって、「また参加したい」と思えるような研修会にしていきたいと強く感じている。

アンケートへのご協力、大変ありがとうございました。

アンケートの集計内容が、「安全で楽しい登山」に少しでも貢献できれば幸いです。